

2024年度国際日本学コンソーシアム【報告要旨】

報告タイトル：

表出するアイデンティティの戦略的選択：日本で就業する日系ペルー人の語りから

お茶の水女子大学大学院（院生）

貞安 薫

<発表要旨>

1980年代以降、日本に滞在する外国人が増加している。滞在が長期化する外国人も存在し、長期間にわたって異文化に滞在する外国人は、言語や異文化接触から生じるストレス、アイデンティティの揺らぎ等の問題を抱えるとされている。また、在留外国人の中には、南米等から移住してきた日本にルーツをもつ「日系人」も多く存在し、彼らの背景は一様とは言えない。さらに、南米の中でも、戦後、日本政府による海外移住政策が再開されなかったペルーは、日系コミュニティが独自に発展したとされ、そのような歴史的経緯は日系ペルー人のアイデンティティにも影響を与えている可能性がある。

このように多様な背景を持つ在留外国人の増加に伴い、個人の内的な問題であるアイデンティティ問題への取組みの重要性が指摘されている。また、国際化や情報化が進み、人間関係がより多様で複雑化した現代社会では、アイデンティティは固定化された単一のものではなく、状況に応じて立ち現れる多元的なものとして捉えられる傾向がある。そこで本研究は、日本で就業する在日日系ペルー人を対象に、彼らが自身のアイデンティティをどのように捉え、どのように表出しているかを明らかにすることを目的とする。

調査協力者は、義務教育期間中に、就労目的で日本へ移住した親と共に来日し、現在、日本で働く30～40代の日系ペルー人の男性5名である。調査は、個々の経験の深い聞き取りを行うため、ナラティブ・インタビュー調査を1人につき、3～4回実施した。分析方法には、インタビュー・データの文脈や発話の意味の解釈を重視する修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いた。

分析の結果、調査協力者らは来日後、ルーツである「日本」と「ペルー」の2つ文化の間で葛藤や孤独感を抱いてきたが、日本で生活する中で、2つのルーツを肯定的に受け止める複合的で柔軟なアイデンティティを育んできた様子が窺えた。そして、日本社会で生き抜くために、アイデンティティ資源を活用して、状況に応じて「何を見せ、何を隠すか」を選択し、表出するアイデンティティを意識的にコントロールしていることが確認できた。そこからは、マイノリティとして社会的弱者の位置に留まることなく、能動的に自身の在り方をつかみ取り、日本社会で力強く生きる姿が浮かび上がってきた。本研究の結果は、今後ますますの増加が予想される在留外国人の多様化する内面の問題への理解の一助となるものとして貢献できると思われる。